

## 「鳥の眼」から「虫の眼」に、目線を変えれば…

この国の社会をいま覆っている閉塞感は、どこから来ているのだろうか。

「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われたのは、30年以上も前の高度成長時代のこと。「経済大国」を謳歌した時代は遙かかなたに去り、貿易収支は赤字基調が続き、国家財政は危機に瀕しているが、政治家にも官僚にもその危機感が感じられない。国民の暮らしは格差社会が広がる中で貧富の差が深い谷間をのぞかせ、過労死と“自殺王国”、超高齢社会の中での将来生活の不安が、国民から「希望」を奪い、閉塞状態を加速させている。

その一方で、旧来の企業社会や政治を委ねてきた政党や官僚の力が落ち込み、市民からの信頼感が地に落ちた中で、社会のあらゆる場で市民が存在感を際立たせ、いまだ旧体制の中に埋没している層との間に乖離状態が生まれている。

歴史的転換期に入った90年代以降、ここ20数年来は、国内も世界も市民が政治を動かし、国際政治さえも左右する時代が始まっている。一時的にはトランプ現象に象徴される時代錯誤の勢力が力をもたげているようには見えるが、アナクロニズムが世界を席卷するかのような一部メディアの論調は、木を見て森を見ない、大きな歴史の流れを見ない近視眼的な見方に過ぎないだろう。もはや、国民の心情を反映し得ない“永田町的視野”に取り憑かれ、ゆがんだ選挙制度の結果に過ぎない「一強多弱」体制と安倍政治の長期的継続を信奉する視野の狭さに由来するものだろう。

眼を地方の現場や、地べたの市民の動きに転じれば、違う世界が見えてくる。

全国各地で静かに進む「野党共闘」を求める市民の動き。東京ではすでに、25の小選挙区のうち15の選挙区で「市民と野党の共同」を進める市民組織が立ち上がり、野党候補者の統一へ向けて動いている。3月13日には衆議院第一議員会館で、市民と野党をつなぐ会@東京が300人規模の「平和とくらしのために、統一候補で勝利しよう」大集会を開く。

兵庫県でも、12の小選挙区のうち9つの選挙区で「地域みなせん」が活動し、野党候補予定者との意見交換を重ねて、候補者一本化への地ならしを続けている。3月5日に連帯兵庫みなせんが開く「野党共闘と市民の共同選挙・学習交流会」は、次期衆院選挙に向けての本格的な活動へのスタートになる。奈良や大阪の市民組織も駆けつけて、交流する。

統一候補の要になる野党第1党の民進党は、3月12日の党大会に向けて「原発ゼロ」政策の前倒しなどの共闘体制づくりに取り組んでいる。その最中に露呈した原発事業での東芝のつまづきや、福島第一原発での廃炉作業の行き詰まりなど、安倍政治の足元が静かに崩れつつあることにも眼を向けたい。

永田町や霞が関の“政局”に振り回されることなく、世界の流れに目線を据えるとともに、足元で静かに進んでいる地殻変動を見逃さない「虫の眼」を大事にしたい。